



第2回放課後子ども教室研修会

目的：放課後子ども教室推進事業の先進的な実施状況を見学したり、成果や現状について協議したりするなど、実践を学ぶための研修会を行い、事業に携わるコーディネーターやボランティア人材の資質の向上を図る。

実施日：平成28年10月13日（木） **場所：**本宮市立本宮まゆみ小学校 **参加者：**70名

講話 「気になるお子さんへの対応について」

福島県養護教育センター 指導主事 今泉 祥子 氏

1 共生社会と障がい観

共生社会とは、性別・国籍・年齢・障がいの有無・家庭環境など、多様な個人が、社会から排除されることなく、能力を発揮しつつ、自立してともに社会に参加し、相互に支え合う社会（内閣府ホームページより）である。

「障がいがあるから仕方ない」ではなく、「活動」「参加」を制限している「環境」を問題視し、「どうすれば活動できるのか？」「どうすれば参加できるのか？」を考えていきたい。



2 気になる子どもの理解

障がいの特性を知らずに、「どうしてできないの？」「何回言ったら分かるの！」などの誤解と不適切な対応が続くと自尊感情が低下してしまい「不登校」「いじめ」「非行」などにつながることもあり、深刻な二次障がいを招いてしまう恐れがある。「かんしゃく」や「こだわり」などの目に見える行動にとらわれすぎないようにしたい。「うまく表現ができない」「行動や感情のコントロールができない」などの目に見えない「子どもが本当に困っていること」を理解し、手をさしのべることが大切である。

3 放課後子ども教室に求めるもの

放課後子ども教室は、いろいろな年齢構成の社会であり、友達と一緒に遊べる場、いろいろな経験ができる場、エネルギーを発散できる場である。子どもは、放課後子ども教室に自分の居場所、自分を認めてくれる人、自分の仲間を求めている。

4 困難さの理解と子どもとのかかわり方

① 見え方の困難さ

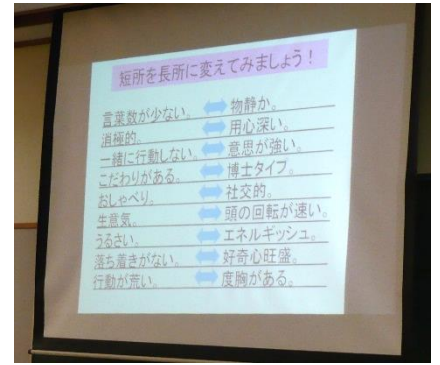
上下、左右など眼球の動きがぎこちなく、動くものを追えなかったり、漢字、図形などの形を捉えにくかったりする子どもがいる。このような子どもは、落ち着きがないように見えたり、教科書の文字が追えず行をとばして読んだりすることが多い。こうした場合は、読む部分に注目できるように読む部分だけ見せたり、絵に描かせてイメージ化を図ったりするとよい。

② 聞こえ方の困難さ

特定の苦手な音があったり、聞き分けられなかったりする子どもがいる。このような子どもは、集団に出された指示が認識できなかったり、話に集中できなかったりすることが多い。こうした場合は、顔を見たり、肩に手を置いたりして注意を引きつけたり、絵や写真、プリント、板書、カードを活用したりするとよい。

③ 言葉の困難さ

字義通りに受け取り、冗談や比喩が分かりにくかったり、自分の気持ちや理由を適切に表現することが苦手だったりする子どもがいる。このような子どもは、相手の感情に応じた話し方ができなかったり、冗談が通じなかったりすることが多い。こうした場合は、身近な場面を設定して、望ましい言動を具体的に例示したり、「こうすると(こう言うと)相手にこう伝わるよ。」「相手はこう思うよ。」などと、具体的に分かるように伝えたりするとよい。



④ こだわりや興味の偏り

いつもと違うことへの抵抗のある子どもがいる。こうした場合は、いつもと違う局面になったら、丁寧に説明し、どう考え、どのように行動したらよいか分かるように説明したり、全体の言葉かけだけでなく、個別にも言葉かけを行ったりするとよい。

◎ いろいろな子ども、そして様々なケースそれぞれに、対応のポイントがあるが、子どもと、支援者との間に信頼関係が築かれていることが大切である。

⑤ 子どもに伝わりにくい表現

・指示の出し方 <こそあどことば>

これをちゃんと片付けなさい ■ 本を本棚にしまいましょう

・場面、人との関係 <きまりや約束、ルール>

やってはいけないって約束でしょ! ■ 約束は〇〇だよ。守れたかな?
~文字や絵にして知らせる~

・見通しや計画 <順序や段取り>

こっちをやってからにしたら? ■ 順序を提示する、図にして示す。

・増やしたい行動 (これからも続けて欲しい行動)

即座に・笑顔で、できるだけ具体的にほめる。決して批判、コメントはしない。

⑥ 子どもが興奮して、感情的になっている場合の対応

汚い言葉、脅しの言葉、力づくでのかわりは、本人が、そうやって解決していいのかと学ぶ機会になり、自分がされたこと(暴言や叩く、力づく)を、友達に使うようになる(誤学習)。本人が落ち着くまで待つ。落ち着ける場所を用意するとよい。注意する言葉に感情は入れないようにして、落ち着いてから、気持ちを聞くとよい。



⑦ トラブル時の行動への対応例

(1) 本人に「どうしたの?」と話を聞く。

(2) 理由を聞いて、怒らない。

(3) 共感が大切。「そうか~だったんだね。」

(4) 直して欲しい行動を簡潔に伝える。どうすれば解決するか、具体的な方法を伝える。

『私は~~思うよ。~~するといいよ。』『一緒にやってみよう。』

⑧ 改善はスモールステップで

すぐに友達を叩く子どもが暴言を言った。→ 叩くの我慢できたね。一歩前進

(ほめた後に) いつもこうだといいいんだけどと言ってしまうとほめたことにはならない。

実践参観 「まゆみ遊友クラブ」

1 事務担当よりまゆみ遊友クラブと本時の活動の説明

① 活動の概要

【実施場所】本宮まゆみ小学校 ランチルーム

【活動日】毎週木曜日（学校行事等により水曜日に振替もあり）

※長期休暇を除く、年間32回

【活動時間】13時～16時

【対象学年】本宮まゆみ小学校 1～6年

【登録人数】39名（1年 13名、2年 14名、3年 8名、4年 1名、5年 3名）

【スタッフ】コーディネーター（1名）、安全管理員（2名）、活動指導員（3名）

※人手が必要な活動の際は活動指導員を増やして対応（スタッフ登録17名）

【活動内容】・身体を使った遊びやゲーム ・工作や折り紙など造形活動

・おはなし会など読書推進の補助的活動

・学校の宿題など家庭学習推進の補助的活動 など



② 本日の活動「押し花工作」

5/19に実施した「押し花づくり」で作成した自分の押し花を使って壁飾りを作る。

「押し花づくり」では自分たちが取ってきた根っこからの草花を押し花にする活動を行った。

押し花用の乾燥シートや和紙は、押し花インストラクターの鈴木九良子さん（活動指導員）の私物を使わせていただき、管理もしていただいた。

根っこから作成した押し花を通して、（目には見えない）『根っこ』の大切さを伝えたいという九良子さんの思いが込められている。

2 実践参観



【参加者からの声】

- ・子ども一人一人の特徴を見ていかないといけないなと思いました。最近私が怒ってばかりいて、子どもがかわいそうと思いつつ、何度言っても同じことの繰り返しで怒っていました。先生が言っていた、褒めてあげることを意識して、子どもたちの考えや気持ちを変えたりしてあげていけたらと思いました。
- ・日々気になる子どもたちが多くなっているように思います。安心して過ごせるような場にしていくには個々人の特性を知ることの大切さを感じました。
- ・講話では、色々な対応についてお話し頂き、とても参考になりました。とにかく、場数を踏まなければと思いました。子どもたちと共に・・・と言うより、子どもたちに大人として育ててもらいながら一緒に成長していこうと思います。
- ・気づきが分かりました。視点の違いなど具体的に説明があり、大変分かりやすかったです。子どもとの関係がいかに大切であることがあらためて分かりました。実践参観では、目に見えるものだけではないと「根っこ」を通して考えるきっかけになる取組に感じました。